

先進県目指そう

山陽新聞社は今年、岡山から国際貢献のあり方を問う連載企画「手と手—岡山発国際貢献」に取り組むにあたり、岡山を拠点に海外で活動するNGO（非政府組織）や研究者、国際貢献先進県を目指す岡山県の担当部長に現状と課題について語ってもらった。



ありもり・ゆうこ 1966年岡山市生まれ。マラソンランナー。就実高、日本大を経てリクルートに入社。92年バルセロナ五輪で銀メダル、96年アトランタ五輪で銅メダルに輝いた。98年、ハート・オプ・ゴールド（のちNPO法人）を設立し、代表に就任。カンボジアと東ティモールでスポーツを通じた国際貢献を展開。2002年から世界人口基金親善大使を務める。

小川 現在、重点を置く取り組みは何か。
有森 カンボジアではスポーツ指導者の養成力を入れている。日本からバレーボールやサッカーなどの指導者を派遣。初日は先生を指導し、翌日は受講した先生が千人前後の子どもを教える。あなただちが日本に帰ってもいように、自分たちが力の子どもを育てたい。この現地の依頼で作ったプログラムだ。
親善大使になってからはエイズ問題も取り組んでいる。最近、カボジア政府はスポーツの重要性に気付き、保健体育のテキスト作りを依頼してきた。JICAと共同で進めている。
菅波 力を入れているのは、西のジュネーブ、東の岡山」の実現だ。これは、緒方貞子さん（JICA理事長）が国連難民高等弁務官時代、国際NGOや国連、いくつかは難民キャンプを去らなければならぬ、だから現地ローカルNGOと手をなかなければならないと発言されていたことに由来する。いまだに完成していない理由は、国連や欧米の国際NGOが一人を助けたい。基本コンセプトは人権なのに対し、ローカルNGOは相互扶助で、両者の考えを融合しないからだと思う。岡山がローカルNGOの拠点になって、ジュネーブでも同様に難民援助、緊急人道援助を進めたいという

はじまり

ト・オブ・ゴールドの立ち上げにかかわった。今、活動はカンボジアから東ティモールにも広がっている。二〇〇二年からは国連機関の世界人口基金親善大使としてフリカなども視察し、多くの勉強をさせてもらっている。
菅波 学生の時、アジアを旅してアジアの活気に触れ、アジアにかかわりたいと思うようになった。ベトナム軍のカンボジア侵攻に伴い、タイ国境で難民があふれた七九年には現地に乗り込んだが、善意だけでは何もできないことを痛感。八四年、アムタを設立した。岡山県民は弱者の痛みを分かち合う心を持っている。阪神大震災における支援は、弱者が存亡の危機に瀕した時に動く岡山の風

スポーツの“力” 実感 有森氏

橋本 経済発展こそ世界の貧困を救う道との思いで、カナダや英国で理論経済を研究していたが、経済発展と貧富の差が拡大する途上の現実などに触れ、福祉の視点が必要だと思ふようになった。十数年前、友人のボンベイ大教授の勧めで、インドに行き、教育支援NGOと出合った。インドでは学生たち

がNGOでのソーシャルワーク実習を通じ、問題解決のプログラムを作りあげるまでの力を身に付けていた。マンパワーに圧倒され、今もインドに言い続けている。
山本 岡山県は九六年に国際化推進プランで「世界とともに生きる岡山」をスローガンに掲げた。交流から協力への歩みだ。〇二年には菅波さん、有森さんに参加していた「岡山発の国際貢献を考える会」が発足し、救援物資を備蓄センターなどが提案された。ここさらに協力から貢献へ、一歩進める考え方を示し、都道府県で初めてとなる国際貢献条例を制定した。

試行錯誤

理想を掲げネットワークを進めてきた。AMD Aは今、世界二十九カ国に支部がある。
橋本 吉備国際大は〇四年、インドのブーネ市にあるカルベ大学院と国際協力実習の受け入れ機関として覚書を交わし、岡山の学生をインドの学生実習に参加させてもらっている。実習先のローカルNGOは、問題解決の心を持っている。対象者に自信をつけさせ、能力を引き出すノウハウを持っている。質の高いソーシャルワークに学ぶことは非常に多い。
山本 条例に先立って、岡山空港に設けた備蓄センターには、これまで五百六十人、百六十七団体から物資の寄付を受けている。環境、消費者団体など幅も広がり、大規模な地震に見舞われたインドネシア、パキスタン、新潟県などに物資を届けてきた。NGOとの連携も進む。〇五年、度から県がNGOの提案を受けて必要な人材を派遣する事業を開始。カンボジア、ラオス、上海に派遣した。
小川 活動が広がる中で課題もある。菅波 将来的に、AMD Aの支部は少なくとも五十カ国に広げたい。国連認定NGOとして、さらなる国連外交を本格化させなければならぬと考えており、近々、ジュネーブとニューヨークで活動を始めよう。



すがなみ・しげる 1946年、広島県神辺町生まれ。岡山大学大学院医学研究科修了。84年、AMD A（のちNPO法人）創設。岡山市で内科病院などを運営しながら、海外の29支部や国連機関などと連携し、保健医療を中心とした災害



地域NGOの拠点に 菅波氏

定。また、スマトラ沖地震のそれの国の大学の存在の太された。研究や政策提言能力を有する機関を持つ大学は重要な現在、一カ国に一大学との連れている。
有森 スポーツはあくまでための手段。マラソン大会をのびのびと、その時々の現歩に対応しながらやるべき。きた。たが、カンボジアがているかと言えば、そうではない。たが、「自分たちでやけたい」という考え方をどうは課題だ。
山本 国際貢献の主役はNPOだ。彼らと連携を深めていく。これまで国際ボランティア養成、救援活動要員養成講座などに携わっているが、ここ企業や個人の参加が増えていくことが課題だ。
橋本 学生のインドでの実習本社会で先がけたい。若者も効果もある。自信がなく、進歩しない。単位認定されていなくても、学生を連れてい学生たちの経済的負担がネット

支援 つなぐ心

出席者
有森 裕子氏
菅波 茂氏
橋本 由紀子氏
山本 剛氏
コーディネーター
小川 秀樹氏

NPO法人ハート・オブ・ゴールド代表
NPO法人AMD A代表
吉備国際大社会福祉学部助教授
岡山県企画振興部長
山口県立大国際文化学部助教授



はしもと・ゆきこ 1950年、高知市生まれ。青山学院大経済学部卒、岡山大学院産業文化研究科博士課程単位取得退学。日本貿易振興会研究助手などを経てインドの教育支援NGOドアステップ・スクール役員を務める。2000年から現職。専門は国際社会福祉論。06年4月開設される吉備国際大大学院国際協力研究科の教官に就任予定。

小川 国際協力として日本ではODA（政府開発援助）、政府の仕事というイメージが強いが、世界は逆。NGOが先でODAは後から登場した。また、企業の貿易や投資、移民の受け入れ、軍事協力まで含めて国際協力をとらえるのが世界の常識だ。国際貢献は、湾岸戦争以後に使われ始めた言葉で、国際協力よりはるかに多義。冷戦終結後、内戦が頻発し、人間の安全保障の重要性が叫ばれるようになり、日本が得意とする円借款で途上国の経済発展を助ける手法から、直接、貧困削減に取り組む手法へ重点が移ってきた。欧米ではODAの多くをNGOが実施している。日本でも草の根の支援が求められる、今後、自治体やNGOが重要性を増す。それぞれの立場から岡山発国際貢献の可能性について語ってほしい。

菅波 さままま現場で、現地の人が一番知りたがることは、現状、なぜ日本がここまで発展したか。現在、日本には、治安、健康、食、就業、文化という人間の安全保障の要素がそろっているが、日本の成功の理由は、GO（政府）が優れていたからだと見える。

可能性

医の半分以上が業務を再開できたのは、GOが迅速にインフラを回復させたから。NGOは対人サービス。法律や道路、エネルギーなどのインフラ整備はGO。国際貢献は、それが役割を踏まえて連携しなければならぬ。全国に先駆けて国際貢献条例という法、を、県議会の全会一致で定めた岡山県の世界に対する国際貢献都市としてのアピール力ははずばい。

山本 国の国際貢献は、外交が中心なので相手国との関係に制約を受け、地方の国際貢献は個人やNGOの活動を発祥としている。人と人とのつながり、その集まりが岡山発の国際貢献。人間本位の支援が重要利があるだろう。

菅波 国際貢献を通じて岡山の特性を戦略的に生かすことも可能。岡山県は大学を核とする高い医療水準を有し、水産コンテナートの公害に対処した経験などから環境問題の蓄積もある。マスカットや白桃などの高品質な果物を生産する農業技術もある。すでに海外で地歩を固めた岡山のNGOが複数ある。県とNGO、企業、大学などが連携していれば、日本の国際貢献においても相当の役割を担えるのではないかと。

橋本 これまでの国際協力で反省すべき

現場で役立つ人育成

は、相手国の文化を十分に国文化や価値観を押しつける。政府や中央のNGOから遠く、マクロ的な発想で発展してきている。地に守られてきている。吉備国際大は新年度、研究科（通信制）を新設する。研究科は地方組織の人役に立つ能力を身に付け、岡山発の貢献に寄与したい。

有森 活動が広がる中、みんな団体とながらなくなった。他のNGOのメンバーが専門でない部分があつて、グループと一緒に自分ごととして取り組む。パートナーシップを結ぶ、それが解決したい世りい方法ではない形ではないか。岡山には活発である。AMD Aという県も積極的の岡山の可能性



やまもと・つよし 1947年、高梁市生まれ。高梁高、立命館大法学部卒。71年、岡山県職員となり、廃棄物対策課長、生活環境部次長、真庭地方振興局長などを務めた。

小川 未来に向けて夢を語り合いませんか。

菅波 国際貢献と岡山の地域振興をどう結びつけていこうか考えなければならぬ。実体経済を持つ国際貢献産業を興さなければ、県民も本当には動かないと思われた。国際貢献産業とは、国境を越えていく国際産業と国際NGOが一緒にいること。途上国の最重要産業である。



おがわ・ひろたき 1968年、岡山県方町生まれ。井原高、早稲田大政経学部、ベルギー留学、国連勤務などを経て、カンボジア平和を機に国際ボランティア活動へ。98年にはAMD A顧問として、水難民支援などに従事。横浜国立大国際社会科学部研究科博士課程修了。2002年から現職。専門は国際関係論。参議院議員補選員としてODA調査を担当している。

夢を語ろう

る農業、高齢者の保健福祉など岡山の得意分野も多い。

山本 条例は「国際貢献活動の推進が活力ある地域社会の発展に寄与するもの」として、国際貢献活動が地域社会の発展につながることを「国際貢献先進岡山」と言える。

有森 若者は海外の現場ですごく変わる。これ大切なことではないか。ハート・オブ・ゴールドは多くの大学生にボランティアで参加してもらっているが、学生は現地で自分がどう生きていけばよいかを考えている。自分自身を見直すいい機会になっている。

橋本 人材育成でのインターンシップの有効性は広く認められ、多くの企業が取り組んでいる。ただ、海外となると、費用の面に苦労している学生も少なくない。国際貢献のインターンシップにかかる費用の半額を補助する事業には、いへん

多様な主体が連携を

小川氏

感謝している。参加した学生は、計画立案や帰国後の報告に一生懸命取り組み込んでおり、成長も著しい。

山本 国際貢献インターンシップ事業は三年目になる。これまで県内五大学の14人が活用し、その多くが帰国後もNPOやNGOの活動に参加している。今後は高校生向けの支援策も検討したい。

菅波 地方財政が厳しい今、補助金のシステムは持続可能でない。意欲、能力のある若者ならだれもがチャンスを生み、そのチャンスは次の世代に引き継ぎたい。

有森 インターンシップ事業も、返済を義務づける奨学金制度にできないか。国際貢献産業を開発する企業に、基金を募り、奨学金を連用してはどうか。

小川 奨学金で若者が現地で踏み出すチャンスが広がれば、国際貢献のすそ野がさらに広がるだろう。

菅波 有森さんはプロとして引退を考えたというそうだが今後、スポーツは、人間が生きていく上で、重要な要素を持っているもの。人間の強さ、感動を促す要素がある。国の状況がどうあれ、必ず必要とされる。プロとしては近引退するつもりだが、今後とも途上国の子どもたちと一緒に走り続けたいと思う。

菅波 スポーツは人間の安全保障に欠かさない生きる喜び、文化、ハート・オブ・ゴールドの素晴らしい。有森さんが一緒に走って汗を流すこと。教をあげること。米、上野のスーパーマーケット、途上国に受け入れ、トナリショップの援助だ。

小川 AMD Aのような国際NGOがある地方都市は国際貢献のニーズに日常このでできる県民は他にない。また日本の国際貢献の第一インフラで、岡山県た県警の高田君さんだけ職員一人を随時監視に派遣忘れてはならない。公設国校に加え、吉備国際大に国学院も開設される。優秀な人材が育ち、それだけ発の貢献が可視化された。ただ、いた国際協力の分野で日本さ。国際貢献先進県として知られるためには、人材、情報などの不足を補い、多様な主体が連携する事例積み重ねていく努力が必要

学生の海外活動応援

山本氏